

花山院研究（その3）

今井，源衛

<https://doi.org/10.15017/2332824>

出版情報：文學研究. 61, pp.59-78, 1963-03-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

花山院研究

(その3)

今井源衛

第五章 歌人としての花山院

歌人としての花山院を述べるに当って、はじめに、その知られるかぎりの和歌を左にまとめておく。配列順は四季・恋・賀・哀傷・離別・羈旅・神祇釈教・雑・連歌・長歌とした。

春

正月一日の御歌

1 こち風はこほりとくとも春がすみ立つはじめをば吹きな乱りそ
(夫木抄 一)

2 朝まだき祈る卯枝のしるしあらば千里の坂もゆかざらめやをきこしめして
(夫木抄 十五)

3 降る雪も鶯の音も春くればうちとけやすきものにぞありける
雪中梅花といへる心を
(玉葉集 一春上)

4 梅が枝にふりかさなれる白雪を八重咲く花とおもひけるかな
(続古今集 一春上)

5 色香をば思ひもいれず梅の花常ならぬ世によそへてぞ見る
梅
(新古今集 十六雑上)

6 佐保山はもみぢの色もなにせむに春の梅をぞみるべかりける
紅梅をよませ給ひける
(夫木抄 三)

7 香をだにも飽くことかたき梅の花いかにせよとか色のそふらむ
花
(新拾遺集 一春上)

8 春雨にちりかふ花を朝寒みけさはみぞれにわざぞかねつる
題しらず
(夫木抄 四)

9 おぼつかないづれなるらむ春の夜の闇にも花を折り見てし
がな
花を御覽じて
(万代集 二)

10 ねたしわれよそにのみ見む桜花思ひかひなくこそも散りに
き (万代集二)

春の御歌の中に

11 いしばしる滝にまがひて那智の山高根をみればはなの白雲
(夫木抄 四花)

題しらず

12 霞たつ山のさくらはいたづらに人も見えて春やすぐらむ
(続千載集 二春下)

折花といふことを

13 山守もいかがいふらむいたづらに風にまかする峰の桜を
(新拾遺集 二春下)

給うける

14 花の木どもをあまた植ゑさせ給ひて風吹きける日よませ
(玉葉集 二春下)

題しらず

15 足引の山に入日るときしもぞあまたの花は照りまさりける
(風雅集 二春下)

庭の桜の散るを御覧じてよませ給うける

16 わが宿の桜なれどもちる時は心にえこそまかせざりけれ
(金葉集 一春・新撰朗詠集上)

帰雁をよませ給ひける

17 かりがねはなにそぐらむあめもよにわさ田もいまだかへ
ささる時 (万代集 一)

三月三日桃の花を御覧じて

18 三千代へてなりけるものをなどてかはもとしもはた名づ
けそめけむ (後拾遺集 二春下)

潤三月花山院のさくらの花のちりたる枝につけてたまへ
る

19 さくら花春くはれるとしもそつねよりも猶ちりまさり
ける (大式高走集)

苗代

20 苗代の水かけ青み渡るなりわさ田の苗のおひいづるかも
(夫木抄 五苗代)

山吹を

21 もろこしの人に見せばややきがねの黄金の色にさける山吹
(夫木抄 六)

春の盛に都のかたを御覧じて

22 足引の山に入日のさす時はみやこの花もかくれなきかな
(万代集 二春)

三月尽のころを

23 をしめどもいぬるものゆゑ春ごとにけふをこりずもなげき
つるかな (万代集 二)

夏

24 世をそむかせ給ひて後花橘を御覧じてよませ給ひける
宿ちかく花たちばなはほり植ゑし昔をしのぶつまとなりけ
り (詞花集 二夏)

題しらず

25 ことしだにまづ初声をほととぎすよにはふるさで我に聞か
せよ (詞花集 二夏)

郭公

(玉葉集 四秋上)

26 きけばあり聞かねばわびし時鳥すべて五月のなからましか
ば
(夫木抄 八)

題しらず

(詞花集 三秋)

27 時鳥まれなるこゑをきくごとにさも住みゆくもなりまさる
かな
(万代集 三)

夏の御歌の中に

寛和元年の内裏の歌合に露

28 春を今はいたくも恋ひじ足引の山ほととぎすうらみもぞす
る
(新拾遺集 二春下)

37 萩の葉における白露玉かとして袖につゝめどたまらざりけり
(統千載集 四秋上)

29 こゑきかですぐせるとしはなきものをなほめづらしきほと
とぎすかな
(類聚歌合 東院歌合)

38 萩の花咲きみだれたるたまはこのあしたの露はいることに
みゆ
(夫木抄 十三)

30 かは虫はこゑもたえぬにせみのはのいとうすき身もくるし
げになく
(河海抄 十一)

39 花山院より名もしらぬ花を給はせて
な
(夫木抄 十三)

31 何ゆゑにしのおなるらむ時鳥こゑたてぬ音はくるしきもの
を
(統古今集 三夏)

40 夜もすがらたがそよめくと思ひしはなびく尾花の音にぞあ
りける
(公任卿集)

32 なつのよはたゝくゝひなにほどもなくあまのとゝくもあけ
にけるかな
(類聚歌合 東院歌合 右)

41 大堰河行幸に旅雁雲にまがひて玉章とみゆ
して
(夫木抄 十一薄)

33 草木ゆるがずいみじうあつかりけるころ
(雲葉和歌集 四、夏)

42 大堰川行幸遊ぶ鷗人になれたり
よとともて筏を下す河なればかもめも人に面なれにけり
(夫木抄 三十二)

秋
露ばかり木のは動かぬ夕ぐれにゆるぎの杜はいかがあるら
ん
(雲葉和歌集 四、夏)

秋
七夕を

34 あかれじの心やふかき七夕の年にひとたびまれにのみあふ

42 大堰川行幸遊ぶ鷗人になれたり
よとともて筏を下す河なればかもめも人に面なれにけり
(夫木抄 三十二)

寛和元年八月十日殿上に出でさせ給ふて歌合せさせ給うけるに

43 秋くれば虫もや物を思ふらむこ多もをしますなきあかすかな
(新拾遺集 五秋下)

寛和二年内裏の歌合によませ給ひける

44 秋の夜の月に心のあくがれて雲居に物を思ふころかな
(詞花集 三秋)

月あかき夜

45 わが宿の軒のうら板かずみえてくまなくてらす秋の夜の月
(夫木抄 十三月)

九月一日がたに

46 秋の夜ははやなが月になりけりことわりなれやねざめせらるゝ
(新古今集 五秋下)

山田の心をよませ給うける

47 山田も人とはなしにひたはへて時ぞともなく物をこそ思へ
(新統古今集 五秋下)

十首の御歌の中に

48 山田守いやねざるらむ雁がねの秋の夜ふかくなきわたるなり
(夫木抄 十二秋田)

秋 田

49 秋の田をふきくる風のかうばしみや袖のこる匂なるらむ
(夫木抄 十二秋田)

九月九日を

50 万代をつむともつきし菊の花長月のけふあらむかざりは
(風雅集 八冬)

九月ばかり月あかき夜

51 秋ふかみくもりなき夜のおほぞらにたがかかげたる鏡なるらむ
(夫木抄 十三月)

虫

52 よりあはせなく虫のねをことぢにてひきたてたりな秋のしらべに
(夫木抄 十四虫)

きりぎりすの近くなきけるをよませ給うける

53 秋ふかくなりけらしなきりぎりすゆかのあたりに声きこゆなり
(千載集 五秋下)

虫声秋忽深

54 下露やむすほほるらむ虫のねのよりあはせてもわぶる音かな
(夫木抄 十四虫)

55 大井河行幸に菊の花岸に残りて空なる星かとおどろかれ岸近くまれに残れる菊の花天の河瀬のこちすらしも
(夫木抄 十四菊)

冬 冬

56 冬 夜
くちはしも氷とちてやをし鳥のさむけき夜半におとなかるん
(夫木抄 十七水鳥)

御坐云 乱雪如花といふことをふるめかしきさまにはあらじとて云々

57 いづくぞと見めぐらはせど天の原木の枝だにも見えずもあるかな
(夫木抄 十八雪)

恋

昔御らんじける人の近き程に渡りたるよし聞かせ給うて

つかはしける

58 よそにてはなかなかさてもありにしをうたて物思ふ昨日け

ふかな (千載集 十四 恋四)

三条関白の女御の入内のあしたに遣しける

59 朝ぼらけおつきる霜のきえかへり暮まつほどの咄をみせば

や (新古今集 十三 恋三)

題しらず

60 よもすがらきえかへりつるわが身かななみだの露にむすば

ゝれつつ (新古今集 十五 恋五)

世をすてむと思召しけるころ三条関白の女の女御のもと

に遣はさせ給ひける

61 世の中をはかなきものと思ふにもまづ思ひ出づる君にもあ

るかな (玉葉集 十一 恋三)

物思ふよしきかせ給ふ人に

62 わが身にはくるしき事もしりぬれば物思ふ人のあはれなる

かな (玉葉集 十一 恋三)

恨みおぼしてひさしう音せさせ給はぬ人に

63 つらければかくてやみなむと思へども物忘れせぬ恋にもあ

るかな (玉葉集 十三 恋五)

題しらず

64 ことぞともいはれぬまでにくるしきはこれや恋するためし

なるらむ (続後拾遺集 十一 恋一)

人にたまはせける

65 今よりはあひも思はずぎにける年月さへにねたくもある

かな (風雅集 十四 恋五)

題しらず

66 つらけれどらむるかぎりありければ物はいはれでねこそ

なるれ (貞和本拾遺抄 八 恋下 朱注)

ある人のすゝしの衣を形見にとりかへさせ給ふとてよま

せ給ひける

67 夏衣かふるにつけてつらきかなうすき心はかたみと思へば

(新千載集 十四 恋四)

賀

68 みこたちを冷泉院の親王になして後よませ給ひける

思ふこと今はなきかな撫子の花さくばかりなりぬと思へば

(後給遺集 七 賀)

上東門院の御屏風に

69 ふく風の枝もならさぬこのころは花もしづかにほふなる

べし (続古今集 二十 賀)

人の家に小さき鶴ともかひたるところを

70 ひな鶴を養ひ立て、松が枝の蔭にすませんことをしぞ思ふ

(栄華物語輝く藤壺)

題しらず

71 常盤なる松のみどり子君がへむ千年のかけにあらざらめや

は (夫木抄 卅五 稚子)

哀 傷

世のはかなき事をよませ給うける

72 うつとも夢ともえこそわきはてねいづれの時を何れとか

せむ (千載集 九 哀傷)

弘微殿の女御かくれ待りにける秋雁のなくをきかせ給う

て

73 なべて世の人よりものを思へばや雁の涙の袖につゆけき

(新千載集 十九 哀傷)

こ殿のいみにてまだはてぬに御せうそこにておほせたまへる

74 おほかたになくむしのねもこのあきはこゝろありてもきこゆなるかな

(道信朝臣集)

離 別

実方朝臣みちの国へ下り侍りける時給はせける

75 何事もかたらひてこそ過しつれいかにせよとて君のゆくらむ

(新後拾遺集 九 離別)

羈 旅

熊野の道にて御心地例ならずおぼされけるに蜚のしほやきけるを御覧じて

76 旅の空夜半の煙とのぼりなば蜚のもしほ火たくかや見む

(後拾遺集 九 羈旅)

書写の聖にあひに播磨の国におはしまして明石といふ所の月を御覧じて

77 月影は旅の空とて変らねどなほ都のみ恋しきやなぞ

(後拾遺集 九 羈旅)

神 祇 釈 教

78 熊野にまゐらせ給ひける時はた河にてよませ給うけるいはた河渡る心のふかければ神もあはれと思はざらめや

(後拾遺集 二十 神祇)

三身如来を観する心をよませ給うける

79 世の中はみな仏なりおしなべていづれのものどわくぞはかなき

(千載集 十九 釈教)

80 あだに散る花見るだにもあるものを宝のうゑ木思ひこそやれ

(続古今集 八 釈教)

81 修行せさせ給ひける時みくにの渡りといふ所にとどまらせ給ひてよませ給うける

名にしおはばわがよはここにつくしてむほとけのみくにちかき渡りに

(玉葉集 十九 釈教)

82 法身如来のころを思へどもたとひはかりはなきものをわがさとりてやしらばしるらむ

(続詞花集 十 釈教)

83 御くしおろさせ給ひて後御仏名のあした造花を公任卿のもとへつかはすとて

ほともなくさめにし夢の中なれば昔に似たる花の色かな

(続詞花集 十八 雜下)

84 六道生死輪廻の心をもとの師のさかの教の葉あらばわれ永きよにまどひはてめや

(夫木抄 三二)

85 生死のやみに六道輪廻する心をすべらぎのあづけられたるはこすてゝ今はおなじく中こゝろみむ

(夫木抄 三四)

86 無常心 たゞしばしおくれ先立つくらべ馬のはしりけならぬ世にはあらずや

(夫木抄 廿七馬)

87 露の命草の葉にこそかゝれるを月の鼠のあわたゞしきかな

(俊頼髓腦)

雑

春頭白き人のゐたる所絵にかけける

88 春くれど消えぬ物は年をへて頭に積る雪にぞありける

(後拾遺集 十九 雜五)

修行しありかせ給ひけるに桜の花のさきたりける下にや

すみ給ひてよませ給ひける

89 木のもとをすみかとするればおのづから花見る人になりぬべきかな

(詞花集 九 雜上)

題しらず

90 ころみに外の月をもみてしがなわが宿からのあはれなる

かと

(詞花集 九 雜上)

冷泉院へたかな奉らせ給ふとよませ給ひける

91 世の中にあるかひもなき竹の子はわがへむ年をたてまつる

なり

(詞花集 九 雜上)

世の中はかなくおぼえさせ給ひけるころよませ給ひける

92 かゝしつゝ今はとならむ時にこそくやしきことのかひもな

からめ

(詞花集 十 雜下)

題しらず

93 つくづくと明し暮して年月をつひにはいかがかぞへなすべ

き

(玉葉集 十八 雜五)

題しらず

94 長きよのはじめをはりもしらぬまに幾世のことをゆめに見

つらむ

(統拾遺集 十八 雜下)

題しらず

95 独りぬる宿のどこなつあきなく涙の露にぬれぬ日ぞなき

(新古今集 十六 雜上)

題しらず

96 暁の月みむとしも思はねど見し人ゆゑにながめられつゝ

(新古今集 十六 雜上)

97 津の国におはして汀の芦を見給ひて

ありけれ

(新古今集 十七 雜中)

題しらず

98 新玉の年のはじめにあひくれどなどふりまさるわが身なる

らむ

(玉葉集 十四 雜一)

東院の桜を御覧じて

99 世の中のうきもつらきもなくさめて花のさかりはうれしか

りけれ

(玉葉集 十四 雜一)

雨のふる日もりける所を御覧じて

100 年へぬる宿をふるやといふことは雨のさはらぬ名にこそあ

りけれ

(玉葉集 十五 雜二)

法成寺入道前棋政清水寺にこもりて待りけるにつかはさ

れける

101 滝の音もいかゞきくらむ都だにもあはれなるころにもあ

るかな

(玉葉集 十六 雜三)

題しらず

102 歎くともいふともかひはあらじ世をゆめのごとくに思しな

をしてむ

(玉葉集 十八 雜五)

題しらず

103 入江なる松は年へて老いにけり枝もみどりの苔むしてみゆ

(続後拾遺集 十六 雑上)

百寺の金口うたせ給はむとて夜ふかき道に出でさせ給ふ
とてよませ給うける

104 夜をこめて草葉のつゆをわけゆけば物思ふ袖と人を見るら

む
(新拾遺集 四 秋上)

修行せさせ給うけるとき粉河の観音にて御札にかゝせ給
うける御歌

105 昔より風知られぬ燈火の光にはるゝ後の世のやみ

(新拾遺集 十八 雑上)

大堰河行幸に入江の松年へたる

106 龜山にいざこと問はむこの江なる松のみどりはいくよへに

きと
(夫木抄 二十三)

大堰河行幸に霜の鶴地に立てるを雲のおるゝかとうたが

ひ

107 小倉山おりるる雲は谷川の河辺のたづは遠目なりけり

(夫木抄 廿七)

月あかきに見ふく声をきこしめして

108 目の音にふけゆく空はたぐひつつ月みるほどに明けぬへき

かな
(夫木抄 廿七)

109 敷島の大和にはあらぬ唐猫を君がためにぞもとめいでたる

此御歌は三条の太皇太皇宮のみやより猫やあるとありし
かば、人のもとなりしがをかしげなりしを取りて奉りし

に、あふぎのをれをふだにつくりて、首につなぎて書き

つけさせ給へりし御歌といふ (夫木抄 廿八)

未通女

110 玉のえにすむといふなる少女子が光の花もかくやさくらん

(夫木抄 三五)

題しらず

111 かくしてもいかでか世にはありはてむなくさむばかりとふ
人もがな

(玉葉集 十一)

題しらず

112 わが宿の草葉の露のきえかへりいづれのよにもやすくやは
ある

(万代集 十四)

113 我すらに思ひこそやれ春日野の雪の木の間をいかでわくら
む

(御堂闕白記 長保六年二月六日)

連歌

114 八月はかりに月あかき夜花山院のひが歌よまんとて

あきの夜に山ほととぎすなかませば

さねかた

かきねの月やはなと見えまし

(実方朝臣集)

八月一日花山院の御弓たまはりてのちに、下るべき日延

びければまことにはいつはりかとおほせられて、院のお

ほせられし

いへばありいはねばくるしわかれちを

とあれば

そのほどとだにいかできこえじ

となげきける

(桂宮本実方朝臣集戊)

御集中御連哥 (題注)

おとなしの山にやけふは鶯のこゑめづらしと人のきくらむ

(夫木抄二鶯)

御集関山にて梅花を御覧じての御連歌

年ごとにあふさか山のうめの花ちるをばせきもとゝめざり
けり
(夫木抄三梅)

長歌

題しらず

千はやぶる 神の御代より 木綿だすき 万代かけて

いひいだす 千々の言の葉 なかりせば 天つそらなる

しらくもの しらずも空に たゞよひて 花にまがひし

いろくは 木々の紅葉と うつろひて よるの錦に

ことならず 物思ふやどの ことぐさを 何によそへて

なくさめむ これを思へば いにしへの さかしき人も

なには江に いひ伝へたる ふることは 長柄の櫓の

ながらへて 人をわたさむ かまへをも たくみいでけむ

ひだたくみ よろこぼしくは おもへども くれ竹のよの

すゑの世に 絶えなむ事は さゝがにの いと恨めしき

はまちどり 空しきあとを かりがねの かき連ねたる

たまづさは こころの如く あらねども 常なきわざと

こりにしを 後の世までの くるしみを 思ひもしらず

なりぬべみ 露のなさけの なかりせば 人のちぎりも

いかせむ 谷のうもれ木 朽ちはてゝ 鳥のこゑせぬ

おくやまの 深きこゝろも なくやあらまし
(新拾遺集二十雑下)

以下、右の各和歌について若干の注を付けることにする。たゞし、類歌あるいは本歌の探索を旨とし、歌意には及ぼさない。

1. 古今集巻頭歌、友則の「袖ひちてむすびし水の氷れるを春立つけふの風やとくらむ」に想を借りて、春風よ、氷は解くとも霞を吹き乱すなどひねったもの。「こち風」は、道真の「こち吹かば匂ひをこせよ」の歌で有名であり、大和物語一―二段にも「こち風はけふ日ぐらしに吹くめれど雨もよにはた世にもあらじな」がある。

2. 初句「あさまだき」は、古今集、後撰集には一首も見えず、拾遺集に至って四首、大和物語に一首を数える語である。

朝まだきおきてぞ見つる梅の花夜のまの風の後めたさに(拾遺集一春 元良親王)

朝まだき嵐の山のさむければ紅葉のにしききぬ人ぞなき(同三秋 公任)

朝まだききりふの岡に立つきじは千代の日つぎのはじめなりけり(同五賀 清原元輔)

朝まだき露わけきつる衣手のひるまばかりに恋しきやなぞ(同十二恋 平行時)

朝まだきたつ空もなししらなみのかへるかへるもかへりきぬべし(大和物語巻末附載説話二類)

なお、この中公任の歌については、袋草子に所伝があり、公任の作は、第四句が「散るもみち葉を」となっていたが、花山院はこれを「もみちの錦」と改めて、拾遺集に入れた。そのことを知らせて公任の許に赴いた長能は、公任に一喝されて帰った

とある。拾遺集の撰者がはたして花山院か否かは、まだ確説があるわけではないけれども、「朝まだき」の語が、拾遺集時代の新しい語彙であり、花山院もそれを用いたということは、花山院撰者説に有利な材料ではある。

3. 五句「ものにぞありける」は、古今集以下に多い語法である。花山院もまた、この他に「音にぞありける」(40)・「雪にぞありける」(88)がある。

4. 五句「おもひけるかな」も、古今集に「うつつあるものと——(八三四)」「こかくれたりと——(一〇〇四)」後撰集に「こころのくると——(九八〇)」などの用例がある。

5. この歌については、和漢朗詠集上、古今著聞集五、撰集抄などにそれぞれ異伝が見え、その中で撰集抄のいう、道長の北方からの贈歌に対する院の返歌であるとする説が比較的穩当と思われることは、すでに前稿第四章で述べた。この歌は古今集上春上友則の「君ならで誰にか見せむ梅の花色を香をも知る人ぞしる」或いは素性法師「よそにのみあはれとぞ見し梅の花飽かぬ色香は折りてなりけり」などを本歌としていであろう。然し、それを人の意表をつき裏がえにした奇嬌さが目に立つ。

6. 第三句「なにせむに」は、明らかに万葉調を連想させる。古今集七四四(よみ人しらず)・後撰集一一〇〇(大伴黒主)・拾遺集七四二(よみ人しらず)・八七一(実方)などにも見出される語法であるが、やはり古代的語法とみてよかる。五句「みるべかりける」は、花山院には他にも「植うべかりける」(14)の例もある。後撰集二九一、拾遺集三三三・二九八にも「みるべかりける」が見える。

7. 四句五句「いかにせよとか色のそふらむ」は、院には他に「いかにせよとて人のゆくらむ」(75)もある。古今集に「いかにせよとかあひみそめけむ」(六五〇よみ人しらず)・「いかにせよとかはるゝ時なき」(四六一)があり、拾遺集に「いかにせよとかわがねそめけむ」(七四六)・「いかにせよとかながめらるらむ」(九一八)がある。古今集四六一番の歌は、拾遺集ではその三八〇番に貫之作として出ている。花山院の作は古今集語法の套襲であることほぼ明らかである。

9. 初二句「おぼつかないづれなるらむ」は拾遺集一七八藤原為頼「おぼつかないづこなるらむ虫の音を尋ねば草のつゆや乱れむ」と、関係がありはしないか。この歌は拾遺抄(以下「抄」とのみ記す)にはない。なお「おぼつかない」のみならば、後撰集四四二・一一七六・五六九・七一五・拾遺集一七八・三八六・一〇一六・六二九・一二〇五などに見える。この中、拾遺集のものはすべて抄には見えない。なお又、拾遺集三八六「おぼつかない雲のかよひち見てしがなとりのみゆけばあとはかまなし」は、大和物語五八段に初句「大空の」と交って出ており、説話化されている。この歌も関係がありそうである。

11 初句「いしばしる」は、万葉集八の志貴皇子の「石激垂見之上乃左和良妯乃」の歌を思わせるが、古今集一春上よみ人しらずの歌にも「岩ばしる滝なくもがな桜花手折りもて来む見ぬ人のため」があり、これは古今六帖六では伊勢の作とする。

12 万代集二下句「人にも見せて散やしぬらむ」

14 二句「つくろはずして」漢文訓詁語といわれる「ずして」を和歌に用いているのは、注目される。

16 詞花集一春・新撰朗詠集上春「落花」、玄々集「花山法皇四首」等に所出。これについては歌論書に説がある。難後拾遺抄では、この歌詞第四句を「心にこそは」とし、これが貫之の「我やどの物なりながら桜花ちるをばえこそとどめざりけれ」の本歌取りだと、簡単に指摘するのみである。つぎに俊賴口伝集上には

歌をよむに古き歌によみ似せつればあしきを、いまの歌よみましつればあしからずとぞ承る。家の桜をよめる歌、貫之「我やどの物なりながら桜花ちるをばえこそとどめざりけれ」、同じ歌を花山院「わが宿の桜なれどもちるときは心にえこそまかせざりけれ」。これがやうによみまざる事のかたければ、かまへてよみ合せじとすべきなり。

さらに悦目抄「古歌をとる事」の条には

わざとめかしく耳に立ちて、是をとりたるばかりを詮にて我心も詞もなきは返々も此道の魔道也。才外道なり。秘抄云現大身満虚空現小身入芥子といへり。証歌云（以下右の貫之集所出の貫之の歌と花山院の歌とをあげる）

酷評ではあるが、たしかに当たっている。花山院の作は貫之の歌を本としながら、全く取る所のないものである。おそらくは即興のままの作であろう。ただ貫之の作が、「とどめざりけれ」の語に桜花を擬人化した面白みを狙っているのに対して、院の作は、奔放不羈の生活を送った人にふさわしく「心にえこそまかせざりけれ」と、あらわに詠っているのが注目される。

又、この歌は金葉集三奏本においてはじめて選び入れられた。

17 第四句の「わさ田」は、他にも20に「わさ田の苗の」の例が

ある。ただし万葉集一五六六・貫之集二・貫之集四・古今六帖二「かりほ」貫之などに「わさ田がりかね」が見え、又「わさ田はからじ」は柿本集下・古今六帖一霜などに見える。

24 新撰朗詠集上・古今著聞集五・古来風体抄下・玄々集にも所出、また東院歌合（類聚歌合所収）には三句「今はうゑじ」とある。源平盛衰記五平家物語にも下句が引用されていて、平安末には有名な歌であったらしい。「宿近く梅の花うゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり」（古今集一春上よみ人しらず）・「花の樹も今はほりうゑじ春たてばうつつるふ色に人ならひけり」（古今集二春下素性）などの改作であろう。

25 結句「我にきかせよ」は、後撰集十三恋五に

大輔につかはしける 左大臣

今ははや都を出で、時鳥けちかき声をわれにきかせよ

また蜻蛉日記にも

有りとだによそにてもみむ名にし負はばわれにきかせよ耳くらの山

などの例句がある。

26 初句は万葉集二の

たけばぬれたかねば長き妹が髪この頃みぬにか、げつらむ

か

にこれに似た古い例があり、後撰集雑二 元良親王の歌にも

やればをしやらねば人に見えぬべしなくもなほ返すま

されり

がある。また結句「なからましかば」は

眺のなからましかば白露のおきてわびしき別れせましや

(後撰集十二恋四、貫之)

露だにもなからましかば秋の夜を誰と起居て人をまたまし
(拾遺集十三恋三よみ人しらず) などの例があるが、結句に据
えたものは見当たらない。

28 万代集三には「夏のはじめに」と詞書あり、初句「春を今」
万代集四、四句「萩の上こそ」。古今集五秋上の
なき渡る雁の涙や落ちつらむもの思ふ宿の萩の上の露
を本歌とするものであろう。

37 内裏歌合(類聚歌合所収)五句「とまらざりけり」、幟子を
悼む意のものであることは前述した。露を玉と見立てる例は、
古今集五秋上文屋朝康「秋の野におく白露は玉なれや貫ぬきか
くる蜘蛛の糸すぢ」、伊勢物語「白玉か何ぞと人の問ひしとき
露と答へて消なましものを」他多い。

41 発想の似たものには、古今五秋上、友則

秋風に初雁がねぞ聞ゆるたが玉ずさをかけてきつらむ
42 類歌に 蜻蛉日記

あまたとし越ゆる山辺に家居して綱引く駒も面馴れにけり
43 万代集五、末句「ねをもなくかな」

44 寛和元年八月十日殿上歌合(十卷本類聚歌合三)一番左に見
え、右は公任の「いつもみる月ぞと思ふに秋のよはいかなる影
をそふるなるらん」。詞花集に寛和二年とあるのは誤。公任卿
集・時代不同歌合にも見える。なお後拾遺集四秋上には、この
歌を藤原長能の作とするが誤りであらう。

45 古今集五秋上、よみ人しらず

白雲にはねうちかはしとぶ雁の数さへみゆる秋の夜の月

を本歌とするものか。

46 四句「ことわりなれや」の「ことわり」は、三代集には見え
ない歌語であるが、蜻蛉日記に二、紫式部日記に一、和泉式部
日記に三例ある。比較的新しい語法であらう。

49 三句「かうばしみ」は、歌語としては古く、正統国歌大観索
引を通じて、万葉集に「かくはしき」「かくはしみ」が合せて三
例、「かくはし」が記紀に二例あるのみ。しかし、源氏物語な
ど散文には多く用いられていて、当時の口語であったものか。
56 初句の「くちはし」は、正統国歌大観索引に全く見ないも
の。当時の口語か。奇抜な発想である。

59 「三条関白の女御」は藤原頼忠女誕子。その入内は寛和元年
十二月五日。

61 詞書によれば、寛和元年後半から二年六月までのころの作で
あろう。万代集十八にも見える。

62 万代集十九、二句「くるしき事と」

64 万代集九にも見える。

66 流布本拾遺集および抄には、作者を「よみ人しらず」とする
68 「みこたち」は、清仁、昭登両親王のこと、冷泉院親王とし
たのは、寛弘元年五月四日のこと。海人のくぐつ「とおもへば
といふ詞」の条に、この歌が引かれている。

69 70と共に彰子入内(長保元年十一月一日)の折、道長の求め
によって与えた賀歌である。第四章四節参照。雲葉和歌集九
賀、詞書「ある所の屏風に花おほくさきたる所を」公任卿集に
「花山院の御いれり」として、この歌がある。なお新拾遺集二
春下「春の御歌の中に、御製(後光厳院)吹く風の枝をならぬ

春だにも何をかごとに花の散るらむ」があり、花山院の作の模倣であろう。

73 弘徽殿女御は忒子、寛弘元年七月十八日卒。第三章六節参照。この歌も前掲、古今集五秋上「なきわたる雁の涙や落ちつらむ物思ふ宿の萩の上の露」を本歌とするか。

74 「こ殿」は右大臣為光。その死は、正暦三年六月十三日。第四章一節参照。類歌に後撰集五秋上、よみ人しらず「心ありてなきもしつるかひぐらしのいづれも物のあきてうければ」がある。

75 実方の陸奥守赴任は長徳元年九月廿七日（本朝世紀）、下句「いかにせよとて君のゆくらむ」は、古今集二春下、躬恒「雪とだにふるだにあるを桜花いかに散れとか風のふくらむ」・古今集十物名「あしがきの山辺にをれば白雲のいかにせよとかはるる時なき」・後撰集十恋二「唐錦をしきわが名はたちていていかにせよとかいまはつれなき」などに先例がある。とくに「雪とだに」の歌の模倣の感が強い。

76 栄華物語見はてぬ夢・宝物集三（結句「たかくとやみる」）
・古来風体抄下・時代不同歌合・宴曲「恋」朋哀傷（旅の空夜半の煙と我は消えなでつれもなく螢のもしほ火たきそふる云々）などに見え、院の秀歌として有名であった。「あまのもしほ火」の語は院の造語であり、千載集以後、拾遺愚草中巻、千五百番歌合十八などに、この語をまねて用いたものがある。

77 院が書写山に性空上人を訪れたのは、寛和二年七月二十八日および長保四年三月の二度あったことが知られる。歌意からみ

て、寛和二年七月の時のことであろう。

源氏物語賢木の巻の光源氏の歌

月影はみし世の秋にはらぬをへだつる霧のつらくもあるかな

は、何らかの関係がありはしないか。

78 二、三句「渡る心のふかければ」は、後撰集二十賀、貞信公「君がためいはふ心のふかければ聖の御代のおとならへとぞ」に類句がある。

88 類歌に、古今集一春上文屋康秀「春の日の光にあたるわれなれどかしの雪となるぞわびしき」があり、その想を借りたものであろう。

89 他に和漢朗詠集下雑「山守」（結句「なりにけるかな」）金玉集「春」玄々集「花山法皇四首のうち」・古来風躰抄下・後十五番歌合など多くの書にも見え、院の代表作として有名である。

90 玄々集・大鏡伊尹伝にも見える。類歌に
こころみになほおりたむ涙川うれしき瀬にもなかれあふやと
（後撰集 十恋二 敏仲）

こころみに雨もふらなむ宿すぎて空ゆく月のかげやとまる
と
（和泉式部日記・和泉式部集五）
などがある。和泉式部日記によれば、後の歌は長保五年の作であり、院の和歌がもし和泉式部の歌を模したものとすれば、その晩年の作ということにならう。

91 大鏡五伊尹伝にも見える（後述）

92 初句「かくしつ」は古今集七賀「かくしつ」とにもかくにもながらへて君が八千代にあふよしもがな」、同十七雜上「かくしつ」世をやつくさむ高砂の尾上に立てる松ならなくに」以下後撰集、拾遺集にも見られる語である。

94 続詞花集十八雜下。万代集十八(四句「いくそのことを」)類歌

97 世の中にふりぬるものは津の国の長柄の橋と我となりけり(古今集 十七雜上)

津の国の長柄の橋もつくるなりいまはわが身を何にたとへむ(金玉集 伊勢)

99 難波瀉みじかき芦のふしのまもあはてこのよをすくしてよとや(伊勢集)

世の中のうきもつらきもつげなくにまづしるものは涙なりけり(古今集 十八雜下よみ人しらず)

102 を本歌とするものであらう。類歌

ありとみてたのむぞ難きうつせみの世をばなしとや思ひなししてむ(古今集 十物名よみ人しらず)

うらむとも恋ふともいかが雲居よりはるけき人をそらにしろべき(後撰集 恋六よみ人しらず)

嘆ても云ても今はかひなきを蓮の上の玉とだになれ(重之集)

106 名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと(古今集 九羈旅・伊勢物語 業平)

この歌を本歌とするか。

109 敷島の 大和にはあらぬから衣ころもへずしてあふよしもがな(古今集 十四恋四 貫之)

この歌を本歌とするものであらう。

111 この歌、玉葉集十一恋三には作者を敏行朝臣として、「かくしつゝいかでか世にはなからへむなぐさむばかりとふ人もがな」とある。花山院の作とするのは万代集の誤か、あるいはまた、敏行の作を院がそのまま一部分の語句をかえただけで、自作として用いたものであらうか。

113 頼通が春日神社の勅使として立った日、道長へ贈ったもの。類歌に

春日野の雪間を分けて生ひ出でくる草のはつかに見えし君はも(古今集 十一恋一)

116 共に夫木抄に「御連歌」と頭注するもので、元來は、それぞれ上句、下句の問答体だったものが、相手が分らなくなつて和歌一首の形にまとまったのであらう。114あるいは他の例からみても、これらの中、上半句「おとなしの山にやけふは鶯の」「年ごとにあふさか山のうめの花」がそれぞれ院の作だったかと思われる。

118 この長歌は、古今集十九雜体に見える貫之、壬生忠岑の長歌と関係がありそうである。貫之の長歌は「ちはやぶる 神の御代より くれたけの よ、にもたえず」の語で始まり、「からにしき」「もみぢ葉」などの語がある。また忠岑のそれは「く

れたけの よ、のふること なかりせば」の句で始まり、「ながらの橋のながらへて」の句がある。貫之の長歌の題には「ふる歌奉りし時の目録のその長歌」、忠岑の歌は「ふる歌にくは

へてたてまつれる長歌」とあって、勅命によって家集などの古歌をまとめて奉った時に添えたもので、和歌を讀え、聖寿を寿ぐ趣旨のものである。花山院の長歌は「題しらず」とあるが、やはり歌の道の機能を讀える趣旨のものである。花山院が在位中に、臣下にその家集撰上の勅命を下していることは、前述のごとく西本願寺本三十六人集の能宣集の序文によって知られる（第四章八節）のであるが、この作は、あるいは、その折にでも古今集の長歌を模して作ったものではなからうか。

三 その歌風

花山院が、平安末期において歌人としても有名であったことは、種々の資料によって察せられる。まず大鏡伊尹伝には

さすがにあそばしたる和歌はいづれも人の口にのらぬなく、
優にこそうけたまはれな。

こころみにほかの月をも見てしがな我が宿からのあはれな
るかと

などは、この御有様に思し召しよりけることもおぼえはべ
らず、心苦しうこそさふらへ。さて又冷泉院にたかんな奉ら
せ給へる折は

よの中にふるかひもなき竹の子はわがへむ年を奉るなり御
返し

としへぬる竹のよはひはかへしてもこのよをながくなきむ
とぞ思ふ

かたじけなく仰せられたりと御集に侍るこそあはれに候へ。
まことにさる御心にも祝ひ申さむと思召しけむ、かなしき

よ。
と述べて、院の作歌が人口に膾炙したことを明らかにしてい
る。

また、花山院に家集があったことは、右の文中に「御集に侍る」とあることでも分るが、他にも、前掲夫木抄所出の和歌には多く「御集」と注記されている外、源氏物語語河海抄十一所出の30「かはむしは」の歌にも「花山院御集」と注されている。また和田英松博士は「この御集の事は十輪院内府記文明十五年八月二十二日条に見えれば、その頃まで伝はりしなり」「皇室御撰の研究」(四〇頁)と述べておられる。(筆者未確認)

また我々は前稿第四章六節八節等において院の作歌の中に、少数ながら、思想的にも文学的にも注目すべきもののあることを述べてもきた。院がいちおう当代歌人として、あるいは歌壇の庇護者としての役割を果していたことは、認められるであろう。

然し、以下にはあらためて、院の作品につき全般的な検討を加えてみたいと思う。現存する院の作歌は右にあげた一一八首であるが、それについて、一応整理を加えておこう。

右を出典別に掲げると、左の通りである。()で括ったものは重複分。

拾遺集 66—計一(以下同)

後拾遺集 18(44)68 76 77 78 88 — 七(一)

金葉集 16 — 一

詞花集 (16) 24 25 35 44 89 90 91 92 — 九(一)

千載集 53 58 72 79 — 四

新古今集	5	46	59	60	95	96	97	—	七
続古今集	4	31	69	80	—	四	—	—	—
続拾遺集	94	—	—	—	—	—	—	—	—
玉葉集	3	14	34	61	62	63	81	93	98
続千載集	12	37	—	—	—	—	—	—	—
続後拾遺集	64	103	—	—	—	—	—	—	—
風雅集	15	50	65	—	—	—	—	—	—
新千載集	67	73	—	—	—	—	—	—	—
新拾遺集	7	13	28	43	104	105	118	—	七
新後拾遺集	75	—	—	—	—	—	—	—	—
新続古今集	36	47	—	—	—	—	—	—	—
公任集	39	(44)	(69)	—	—	—	—	—	—
道信集	74	—	—	—	—	—	—	—	—
実方集	114	115	—	—	—	—	—	—	—
高遠集	19	—	—	—	—	—	—	—	—
金玉集	(89)	—	—	—	—	—	—	—	—
玄々集	(16)	(24)	(89)	(90)	—	—	—	—	—
統詞花集	82	83	—	—	—	—	—	—	—
夫木集	1	2	6	(94)	—	—	—	—	—
万代集	71	84	85	86	106	107	108	109	110
雲葉集	9	10	(12)	17	22	23	27	(28)	(36)
後十五番歌合	(89)	33	(69)	—	—	—	—	—	—

類聚歌合	(24)	29	32	(37)	(44)	—	—	—	—	五(三)
時代不同歌合	(44)	(76)	—	—	—	—	—	—	—	(二)
和漢朗詠集	(5)	(89)	—	—	—	—	—	—	—	(二)
新撰朗詠集	(16)	(24)	—	—	—	—	—	—	—	(二)
御堂閨白記	113	—	—	—	—	—	—	—	—	—
栄花物語	70	(76)	—	—	—	—	—	—	—	(二)
大鏡	(90)	(91)	—	—	—	—	—	—	—	(二)
俊頼髓腦	(16)	87	—	—	—	—	—	—	—	(二)
難後拾遺抄	(16)	—	—	—	—	—	—	—	—	(二)
古来風体抄	(24)	(76)	(89)	—	—	—	—	—	—	(三)
悦目抄	(16)	—	—	—	—	—	—	—	—	(二)
撰集抄	(5)	—	—	—	—	—	—	—	—	(二)
宝物集	(76)	—	—	—	—	—	—	—	—	(二)
古今著聞集	(5)	(24)	—	—	—	—	—	—	—	(二)
河海抄	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—

以上述べ総歌数は一六一首、その中重複分四三首、純歌数一一八首である。又その中勅撰廿一代集所出のものは六七首、中重複二首、純歌数六五首である。この勅撰入集歌数を同時代の代表的歌人と比べると、公任九一、好忠九八、実方七四などには及ばない

が、高遠二九・敦忠三〇・道長三四などよりも多く、源順五三・道信五三・道命阿闍梨六六などに匹敵する数である。公任の撰といわれる金玉集に一首、和漢朗詠集に二首が入っている点、公任もまた院の力量を認めていたかとも考えられるけれども、同じく公任撰の前十五番歌合には入っていないところでみれば、それもとおりのことであったことがしられよう。院が三十六歌仙はもろろん、中古歌仙三十六人にも加わっていないのは、強ち帝王であるからだけではなく、その力量が充分でなかったためと考えられるだろう。先に古今集の本歌取りを指摘し、時には俊頼髓脳や悦目抄において酷評を加えられていることを述べたが、試みに以下古今集の本歌取りと思われるものを整理すると、1「こち風は」・5「色香をば」16「わが宿の桜なれども」・24「宿ちかく」・36「秋くれれば」・41「大空に」・45「わが宿の軒のうら板」・37「なべて世の」・88「春くれど」・99「世の中の」・106「龜山に」・109「敷島の」などが算えられる。部分的な語彙語法については、他にも多く指摘できよう。又後撰集その他を典拠とするものも、ないわけではないが、それは古今集に比べれば、明白な本歌取りというべきものは極めて少く、せいぜい右に若干指摘したような語彙語法に止るものではあるまいか。

古来、「花山法皇御筆本」なる文字が、古今集諸本の奥書に見えることは知られており、久曾神昇氏によれば、それは再撰本公稿本系統の第一次本系統本の祖本に当るものであるという（「古今和歌集成立論研究篇」二六頁）。院は古今集を日頃愛読し、それを全巻書写したこともあったのである。その本歌取りが多いのも怪しむに足りない。

しかしひるがえって考えると、そもそもこの貴人にとっては、和歌とは、折にふれ興に乗じて口へのぼせる遊戯であって、その拙速の座興を尊び、より以上の詩情や風姿にあえて介意するものではなかったであろう。院が当代として連歌史上先駆者のな地位を占めることは、島津忠夫氏「短連歌初期の諸相」（連歌俳諧研究第21号）に説があるところだが、連歌のかけあい問答の座興が、時に本歌とりの方向へ動いたまでのものでもあっただろう。また他人の歌の一部分を交えるだけでそのまま自分の歌とする、いわば横著なるまいは、元来がこれまでに詳説してきたような、院の奇矯な一種病的な資質に由来するところも多いであろう。

しかし一方、また院としては、それなりの和歌に対する意識された姿勢も有っていたようである。たとえば、57の詞書に「乱雪如花といふことをふるめかしきまにはあらじとて」とある。新奇を求めるという意識的志向が、この「いづくぞと見めぐらはせど天の原木の技だにも見えずもあるかな」という、奇矯な狙いばかりで詩情の乏しい駄作を生んだとも考えられる。院の作にはこの種のものも多いのである。

三月三日桃の花を御覧じて

18 三千代へてなりけるものをなでてかはももしもはたなづけそめけむ

七夕を

34 あかれじの心やふかき七夕の年にひとたび生まれにのみあふ大堰河行幸に旅雁雲にまがひて玉章とみゆ

41 大空にうちむれととぶかりがねはみどりの紙のふみかぞみる

大井河行幸に菊の花岸に残りて空なる星かとおどろかれ
 55 岸近くまれに残れる菊の花天の河瀬のこゝちすらしも

冬 夜
 56 くちはしも氷とちてやをし鳥の寒けき夜半におとなかるら
 ん

年中行事の題詠や遊宴の折に、この種のものが目立つのは、周囲を意識することの多いためでもあろうか。しかし、では花山院の作は彼が自ら意図したように、果して和歌の新風といいうる程のものであったらどうか。それは甚だ疑問である。試みに長歌と連歌とを除いた他の和歌一一二首の結びの形式を左の如くに分類し、その措辞表現について考えてみよう。

I 肯定判断

(a) 単純な断定

見す103 思ふ70・思へ47・見る54あふ34・する28・思
 ひこそやれ80・はかなき79・つゆけき73・散りにき10・な
 かるれ66寝覚せらるる46・ながめられつゝ96・むすほれ
 つつ60・もとめでたる109・計一七

(b) 単純な断定にして詠嘆を伴うもの

ありける34088・ありけれ97100・なりけり24107
 ままりける1519・露けかりける36・うれしかりけり99・面
 なれにけり42・奉るなり91・きこゆなり53・なき渡るなり
 48・かな42327293243445458616365748387101108・かも20計

三四

II 命令、聞かせよ25 計一

III 禁止 ふきなみだりそー 計一

IV 意志 こゝろみむ85・思しなしてむ102 計二

V 希望 がな911・ばや59 計三

VI 推量 らむ712334951566475829498104110113・らめ92・けむ
 18・らしも55・む7276・べき93・べきかな89108・べ
 し69・べかりける614 計二五

VII 疑問 恋しきやなぞ77 計一

VIII 反語 安くやはある112・まどひはてめや84・ざらめや78・
 ざらめやは271・あらずや86 計六

IX 否定 ざりけり37・ざりけれ16・なき95・見えずもあるか
 な57・わきそかねつる8・なきかな2239 計七

X 倒置 肯定判断の倒置52・肯定推量の倒置1331・希望の倒
 置90・意志の倒置8106・否定推量の倒置50 計七

XI 条件法 266768 計三

XII 体言止め 1117213545105 計六

西下経一氏は「日本文学史中古」(至文堂刊)の古今集の項に
 於いて、古今集の歌風を追究する一方法として巻一〜巻六の全歌
 を断定と不断定とに分けて考え、全体として断定よりも不断定
 (疑問・反語・推量・願望)の方がやや多いとされている。今、
 氏に倣って、以上の数字を断定と不断定とに分つならば、断定は
 I(a,b) II III IV IX及びXの中二例・XIの総計七十二例となり、不
 断定は四〇例となる。即ち、全体としては古今集とは逆に断定が
 はるかに多い。また西下氏が打消の助辞等を手がかりとして古今
 集全歌にわたってしらべてみると、否定的態度によって発想され
 た和歌は、肯定的なものの数に超えたとされたことについていえ

ば、花山院のばあいには、同じく打消の助動詞や反語などすべて合せて四五例となり、半数に達しない。(この西下氏の調査は四季の歌のみを対象としたものであり、方法上に問題もあって、比較の対象として必ずしも適当でないが、他に適当な方法も見当らないままいちおう参考とした) また推量の「らむ」が多いことなども、古今集以下の当代和歌一般に通ずることであろう。

右のような諸点から云えば、院の和歌は、技法・形式のみから見れば、古今集よりもむしろ素朴幼稚な段階のものとも言えるかもしれない。院の和歌が全体に陳腐平凡の印象を与える所以である。斬新さを狙いながら、それを内側から支える詩精神に於いて欠けるものがあつた為に、その狙いはもっぱら人の意外に出ようとする卑俗な奇抜に向い、しかもそれを表現すべき技法に於いても、けっきょく古今集の枠を破り得なかつたと思われるのである。

ところで私は前稿において、院の釈教歌あるいは述懐詠の中に、かなりすぐれた作のあることを指摘した。煩を厭わずに再び例示すれば、

長きよのはじめ終りもしらぬまにいくよの事を夢に見つらむ

つくづくと明かしくらして年月をつひにはいかがかぞへなすべき

わが宿の草葉の露の消えかへりいづれのよにも安くやはあるうつつとも夢ともえこそ分きはてねいづれの時をいづれとかせむ

なげくともいふともかひはあらし世を夢のごとくに思しなし

てむ

時鳥まれなる声をきくごとにさも住みうくもなりまさるかな何故にしのぶなるらむ時鳥声たてぬ音はくるしきものを

山田守の人とはなしにひたはへて時ぞともなく物をこそ思へこれらの歌も技術や措辞からみて、必ずしも秀歌というほどのものではないかもしれない。しかし、それは右にのべたような院の多くの作と比べると、それらのもっている見えすいた新奇の狙いや、露骨な替歌趣味もなく、自ら一つの真実の叙情を果していることは認めて差支ないであろう。

これらは共通して、すべて技巧を用いず、又奇を弄せぬ単純素直な叙情のみであり、一首の構成もまたもとも簡単明瞭なものばかりである。にもかかわらず、これらの和歌の底に流れる救いのない暗い虚無感は無気味な力をもって読者の心を打つものがあるだろう。それは単なる観念としての虚無ではなくして、歯ぎれ悪くねっとり絡みつく声調の中に、肉体化され、生理的な実感を伴って人にうたえてくる。いわゆる帝王風の尊大や楽天性からは程遠く、弱々しく傷いた市井人の魂をのぞき込ませるのである。

花山院の生涯の中に、酔漢のごとき尊大や粗漢のふるまいが多く伝えられ、院の躁鬱病的症状を疑わせるに足るものであることは前述の通りであるが、ではそれとこれとは、いかに組み合わせればよいのか。一つにはそれらの伝説自身が平安末期において発生固定したであろう花山院譚に属するもので、院の実体そのものをどこまであらわしているかは疑わしいという説明もできよう。

また一つには、これらの憂愁のかげりのふかい歌は、その精神病

症の鬱期と関係があるかとの推測も成り立つかもしれない。しかし、根本的には、尊大・傲慢・不羈・放縦の面と、小心・感傷的・繊弱の面とが矛盾したまゝ、院の内部に巣喰っていた——というよりもあるいはむしろ、純情・小心・繊細で物に傷き易いが故に、いっそう外に向っては、終始奔放傲慢に振舞って、心の弱さを隠し、虚無と不安の感情にうち克とうとしていたのではあるまいか。そうした矛盾は多くの平安貴族に共通するものでもあったのである。